

OISCA

—人と育む、地球といきる—



[TOPIC]

熊本発! ソーシャルビジネス始動

スモールビジネス × フェアな関係が社会を変える

APRIL | 4
2022



SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



オイスカ活動とSDGs

～誰一人取り残さない17のゴールを目指して～

SDGs (持続可能な開発目標) は、2030年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標で、「誰一人取り残さない」をスローガンとしています。

17のゴールの多くは、オイスカが指すものと合致しており、オイスカは、SDGsが声高に叫ばれるずっと前から、その達成に向けた啓発活動や具体的な実践活動に取り組んできたといえます。オイスカの指すものが、世界全体が取り組むべき目標として、一人ひとりにアクションを促すムーブメントへとつながってきた流れを歓迎します。

しかし、SDGsという言葉が認知され始めてはいるものの、目標達成のためのアクションが広く一般にまで浸透しているとは言い難い状況で、個人、法人を問わず、「何をしたらいいのかわからない」という声が聞こえてきます。一方で、SDGsを単なる一過性の流行のように受け止めたり、「SDGsウォッシュ」(適切なアクション

がなされていないにもかかわらず、表面的にはSDGsに取り組んでいるように見せかけていることを批判する言葉) のような、ネガティブな印象を伴うものとして敬遠したりする姿勢があるのも事実です。

創立60周年を迎えた昨年、オイスカはEBS (Eco-System based Solution / 自然を守り育み、その力を活用した取り組み) とBBS (Business based Solution / ビジネスセクターとのパートナーシップとソーシャルビジネス) を活動の柱とした10ヵ年計画を発表しました。2030年を達成期限とするSDGsと同じ歩みを進める10ヵ年計画では、オイスカ独自の計画や目標達成に向けた行動が、これまでと同様にSDGsの達成にも貢献するものとなるように取り組んでいきます。

次号からは、「今月のSDGs」のコーナーで、国内外のオイスカのさまざまな取り組みをSDGsの17のゴールと紐づけて紹介していきます。



心の中の天使

一九五二年四月二十八日はサンフランシスコ講和条約が発効し、日本が主権を回復した日です。その日、日本とインドは国交を樹立し、今年は七十周年を迎えます。

インドのジャワハルラール・ネルー首相は、その時、日本に対する戦争の賠償請求権をすべて放棄しました。

それより前の、一九四九年には敗戦後の日本の子供たちを励ますために、上野動物園に一頭の象を贈ってくれていました。親日という言葉以上の温かみを感じます。

オイスカが発足して間がない頃、インドでは早魃が続き食糧不足で大勢の人が餓死するかもしれないと、支援を求められた創立者は、一九六六年の五月に第一次農業開発団を派遣しました。そして七月、インド国会議員サビトリ・ニガム女史がオイスカインド総局のビッグ氏とともに来日。講演の中で、女史は「農業技術者の派遣に深く感謝している」と述べ、最後にインド建国の父と言われているガンジー翁について話をされました。

「私がまだ少女であった頃、ガンジーに次のような質問をした。世の中に悪魔がいるとすれば、一体どういふ人が、或いはどんな形をしたものが悪魔なのでしょう。ガンジーは、悪魔とか、天使とかいうものは、同じ人間の心の中に住んでいる。悪魔が強い力を持っているときはその人は悪魔になる。天使の力が強くなったときはその人は本当に天使のようになる。従って、常に自分の心の中で悪魔と天使との戦いを行い、見極め、常に天使の力に加担し、自分自身が天使になるようにしなければならぬのだ」と教えてくださった。私たちは自分のことばかり考えず、子供のころ、アジア、アフリカ全体、或いはよりよき世界を築くために自分の心の中の天使を育てたいものです」と。

利他の精神に通じる、ガンジー翁のこの言葉をかみしめたいものです。



OISCA APRIL 2022 | 4 Contents

- 04 OISCA NEWS 海外／国内
- 06 オイスカ便り 四国支部
- 08 TOPIC **熊本発！ ソーシャルビジネス始動**
スモールビジネス×フェアな関係が社会を変える
- 10 今月のこの人 西日本研修センター副所長 豊田敏幸
- 12 OISCA SQUARE オイスカ歴史さんぽ／OISCAレストラン／お！ススメOISCA
- 14 INFORMATION 新着情報 ほか

What's OISCA

オイスカ・インターナショナルは、「すべての人々がさまざまな違いを乗り越えて共存し、地球上のあらゆる生命の基盤を守り育てようとする世界」を目指して1961年に創立された国際NGOです。現在、41の国と地域にネットワークを持って活動しています。

公益財団法人オイスカは、1969年にオイスカ・インターナショナルの基本理念を具体的な活動によって推進する機関として生まれ、主にアジア・太平洋地域で農村開発や環境保全活動を展開。特に人材育成に力を入れ、オイスカの研修を修了した現地の青年は、各地で地域開発に取り組んでいます。国内では、農林業体験やセミナー開催などを通して啓発活動を積極的に進めています。

OISCAという名称の意味

O	rganization	機構	人間の生存に不可欠な“産業・精神・文化”のバランスを大事にした発展を世界規模で推進していくことを目的として、このように名付けられました。
I	ndustrial	産業	
S	piritual	精神	
C	ultural	文化	
A	dvancement	促進	

国内 人材育成事業

今年度の研修生・実習生来日の見通し 114名の入国に向け準備が進む

終息の目途が立たないコロナ禍の影響を受け、2021年度は各国から来日を予定していた研修生、技能実習生の入国が叶わず、人材育成事業に大きな影響が出ました。国の方針によって違いはあるものの、多くの国では出入国を厳しく管理しており、また運航便数の制限などから、研修生、技能実習生の出入国が困難な状況が続いています。

21年度の選考で来日が決定していた研修生20名（12カ国・地域）のうち5名が、待機期間が長期化する中で、家庭の事情や日本国内のコロナ感染拡大への不安から訪日研修を辞退する結果となりました。また、技能実習生についても、93名の入国が滞っており、受け入れを予定していた企業や農家からは、「できるだけ早い入国を」といった要望が寄せられています。日本政府は、条件付きで新規外国人の入国を認めてはいるものの、1日あたりの人数を5千人と定めており（3月1日現在）、未だ入国の見込みは不透明な

ままとなっています。

このような状況下でも、研修生や実習生の入国が実現したのには、これまで通りの対応ができるよう、準備を進めています。今年度は研修生26名（11カ国）、実習生88名（5カ国）を受け入れる予定です。特筆すべき動きとしては、しばらく受け入れがストップしていた東ティモールから、元日本大使北原巖男氏の推薦を受けた1名と、ウズベキスタンの沙漠緑化プロジェクトに携わる現地スタッフ1名が来日予定で、同国からは初の研修生受け入れとなります。



コロナ禍で帰国ができず、前年度から研修期間を延長した研修生もいた（前列左から2人目と4人目）。帰国を前に修了証を手にお世話になった先生方と（中部日本研修センター）

国内 四国研修センター

マレーシア人スタッフが活躍 トークショーでオイスカ活動を紹介

2月12日、香川県丸亀市の市民交流活動センターマルタ

スで、オイスカ中讃推進協議会が主催するトークショーが開催され、四国研修センターで研修を担当するファビアン・ミンソンがスピーカーとして登壇。「世界を知る、持続可能な社会を目指して」というテーマのもと、母国マレーシアやオイスカで行っている持続可能な農業などについて

紹介しました。

コロナ感染予防の観点から、定員は15名と少なく設定されていましたが、距離を取りながら会場後方で立ち見をする人も出ていました。オープンラウンジの開放的な空間に集まった参加者らは、飲み物を片手にリラックスした雰囲気



「1時間では足りない」という声も聞かれた

「民族の違いで多様な考えがあることを学んだ」といった感想が寄せられました。会場には「海岸林再生プロジェクト」の写真パネルも展示され、オイスカの幅広い活動を知らせてもらう機会となりました。

海外 フィリピン

南ルソン州立大学との協約更新 CFP推進や人材育成などで協力

オイスカは、フィリピンの南ルソン州立大学と「子供の森」計画（以下、CFP）の推進や若い世代の人材育成などに関する5年間の協約を更新するため、2月15日にオンラインで署名式を執り行いました。

同大学は、質の高い教育や指導を通して、特に貧困の撲滅や地球環境の持続といった分野で活躍する人材の育成を

目標にしており、持続可能な社会づくりを目指して環境保全や人材育成に取り組むオイスカと理念を共にしています。これまでも協約に基づき、日本から林業の専門家を派遣して講義を行ったり、植林ボランティアを派遣するなど、交流を深めてきました。同大学では、SDGsの達成に貢献し得る人材の育成に力を入れたいとし、オイスカとより連

携を深めた教育活動を展開するため、協約を更新する運びとなりました。署名式には、同大学のドレーシー・ゾレタナンテス学長をはじめ副学長ら4名、オイスカからは永石安明事務局長やフィリピンの石橋幸裕駐在代表など4名が参加し、今後の取り組みに関する意見交換もなされました。

人的、技術的な連携を進めながら、CFPにとどまらず、若者への農業研修や国際交流などが推進されることが期待されます。



国内 オイスカ浜松国際高校 地元企業がベルマーク回収を通じ 社会貢献活動を後押し

オイスカでは、CFP支援となるベルマーク回収への協力を広く呼びかけており、全国から集まったベルマークは、静岡県にあるオイスカ浜松国際高校が窓口となって支援申請などの手続きを行っています。

2月16日には、地元企業2社からベルマークが同校に届けられ、贈呈式が行われました。これは、キリンビバレッジ(株)中部圏地区本部と(株)タカラ・エムシーが昨年夏に実施した「ベルマークで届け！子どもたちにエールを！キャンペーン」によって集まっ



上野社長(右)からベルマークが贈呈された

たものと、タカラ・エムシーグループのスーパーマーケット「フードマーケットマム」を含む全店舗で回収したものとを合わせた約7万5千点です。

贈呈式には、タカラ・エムシーの上野拓代表取締役社長、キリンビバレッジ中部圏地区本部の谷井光一 本部長、同静岡支社の西野宏支社長が出席。学校からは生徒会役員やベルマーク回収を担う奉仕活動委員会のメンバーらが同席し、全校生徒も各教室からオンラインで参加しました。

生徒会長の松本海也さんにベルマークを手渡した上野社長からは、「社会貢献に役立ててほしい。私たちも各店舗にベルマークの回収箱を設置して貢献したい」と、心強いエールが送られました。

なお、21年度の友愛援助を通じたCFP支援は、70万円(オイスカ浜松国際高校取り扱い分は52万円)となりました。

※本年度からオイスカ高等学校は「オイスカ浜松国際高等学校」に名称変更しました

国内 長野県支部中信推進協議会 ネグロス台風被災地の復興を願い チャリティバザーを開催

長野県支部中信推進協議会は、2月26・27日の両日、松本市浅間温泉のわいわい広場



市民や観光客など多くの来場者でにぎわった

にて、チャリティバザーを開催しました。これは、昨年12月に台風の被害を受けたフィリピン・ネグロス島への支援のために行われたものです。

同支部は、ネグロス島で進むオイスカの国際協力活動を長年にわたって支援しています。特に養蚕普及プロジェクトに対しては、県内で集めた中古の蚕具を整備して送ったり、同県在住の指導者を派遣

したりと、さまざまな形でサポートしてきました。今回のバザーは、台風の被害状況に心を痛めて、何かできないかと考えた会員らが、品物集めや当日の接客にあたり、ネグロスで生産されたシヨールなどのシルク製品も販売されました。開催に向け、場所の手配や品物などの準備を中心になって担ってきた会員の青木豊子さんは、「台風で被害にあった方たちの生活が早く元に戻ってほしい」と話し、地元メディアからの取材などにも笑顔で対応していました。

国内 寄付月間2021 ウェブ報告会、動画配信が評価受け 寄付月間賛同パートナー賞を受賞

例年12月は寄付月間ということで、全国的に寄付の啓発キャンペーンが行われており、オイスカも寄付月間の賛同パートナーとして、各種発信に努めてきました。昨年度は、

SNSを通じて広く寄付の呼びかけも行いました。

同事務局が募集していた賛同企画として、冬募金を展開するにあたってのウェブ報告会を登録。連動企画として募金募集期間中に、活動現場からのレポート動画を9本公開し、

企画の中の5件に選出され、賛同パートナー賞を受賞。3月1日にオンラインで開催された寄付月間クロージングイベント内で表彰式が行われ、「継続的な動画の配信により、寄付月間を盛り上げ、寄付文化の醸成につながったことが評価された」との講評をいた

いただきました。

ウェブ報告会や冬募金の企画、実施の中心となったGlobal Sustainability Mission (GSM) の吉田俊通担当部長は、「22年度も寄付月間に参画するが、本部だけではなく、オイスカの全国の支部などでも賛同パートナーに登録して、独自の企画で参画できたら」と話しています。

冬募金と連動した活動現場からのレポート動画はこちらからご覧いただけます





四国研修センターの研修生とさまざまな形で交流

コロナ禍による課題の顕在化ということをよく耳にしますが、四国支部も同じです。一つは人が集えないという点。大きな行事もありますが、定期的な会合もできずにいました。私たちは初代の佐藤忠義会長時代から、「用事がなくても集まる」ことを心掛け、毎月常任幹事会を開いて顔を合わせしてきました。リアルに会って話すことでお互いに元気をもらい、「もつとこんなことをやってみよう」とハッパをかけてきました。オンラインでも会合はできますが、やはり画面越しでは、そうした迫力に欠けるように思います。

もう一つは、海外からの研修生の入国ができないため、常に連携して活動してきた四国研修センターに活気が生まれないこと。普段なら、研修生たちがまっすぐに頑張る姿を見て、応援しようという人も増えてくるのですが、そうした機会もないことで、会員を1千名にまで増やそうという目標もなかなか達成できずにいます。

ただ、課題ばかりではありません。今までやってきた行事ができなかった分、知恵を出して、新しい動きも出てきました。三豊市で桜の植林を実施したり（次ページで詳報）、これまで26年間、「山・林・SUN（さんりんさん）体験」として活動してきた、まんのう町の尾の瀬山では、初めてのお花見をしたりと、コロナの影響を受けない屋外での活動を進めてきました。

そして最も大きな活動は、青年会の立ち上げです。SDGsの推進など、オイスカに追い風が吹いている今だからこそ、若い世代が中心になって取り組めるようにしたいと、石井淑雄前会長が陣頭指揮を執り、昨年無事発会することができました。私も30年ほど前に勤務先の仕事でオイスカと関わったことがきっかけで、オイスカを知り入会しました。石井前会長はじめ、オイスカで知り合った方たちとのご縁で今につながっています。青年会のメンバーはまだ20名程度ですが、新しい芽が出てきたことで、これからも頑張っていけると思っています。彼らが中心になって若い世代を巻き込みながら、オイスカを支えてくださる方の輪を広げていきたいと考えています。



四国支部 会長
泉 雅文

支部概要

四国支部は香川県に事務所を置き、四国4県（香川、徳島、高知、愛媛）の9推進協議会により構成されています。発足は1993年4月。当時、四国経済連合会の会長を務めていた佐藤忠義氏が初代会長に就任し、海外植林支援およびボランティア派遣（96年から主にインドネシア）のほか、香川県内にある四国研修センターで学ぶ研修生との交流などを積極的に進めてきました。また、四国各県での森づくりにも継続的に取り組んでいます。

現在会員数は986件（法人会員214／個人会員772）。会員を1000件にまで増やすことを目標に掲げています。

全国の支部や支援組織をピックアップして紹介します

今回は

四国支部

青年会を中心に 若い人たちに活動の輪を広げたい

香川といえば讃岐うどん！

近況

REPORT

天皇誕生日に 三豊市で桜60本を植樹



陽光桜、ソメイヨシノ、八重桜が植えられた

皆さんは、カマタマーレ讃岐をご存じでしょうか。J3に所属するサッカーチームで、讃岐うどんの人気メニューである「釜玉」がチーム名に入っています。昨年12月、カマタマーレ讃岐は、来年秋から三豊市の宝山湖公園のグラウンドを練習拠点とすることを発表しました。現在、宝山湖ホールパーク構想が進み、グラウンドの整備やクラブハウスの建設が進められています。そんな宝山湖公園内で、天

進協議会の協力のもと、桜の木を植える活動を行いました。昨年、オイスカが創立60周年を迎えたことにちなみ、本数は60本。陽光桜、ソメイヨシノ、八重桜の3種類の苗木を日本さくらの会から提供していただきました(人の背丈を超えるほどのサイズの苗で、前日の準備が大変でした……)。

地元の子どもたちと一緒に植樹ができたなら、と考えていましたが、コロナ禍でもあり断念。しかし、当日は、大野敬太郎内閣府副大臣、三豊市の山下昭史市長、カマタマーレ讃岐の池内秀樹社長をはじめ、オイスカ会員など約60名が集まってくださり、公園を訪れる多くの方に桜を楽しんでもらおうとの思いで作業を行いました。

この植林によって美しい景観が生まれ、たくさんの方の憩いの場となることは間違いありません。また、森の大切さを実感できる場所にもしたいと考え、例年オイスカが参加を呼びかけているグリーンウェイブの一環として、5月22日にこの場所の下草刈りのボランティア活動を実施する予定です。多くの人たちの手

で素晴らしい憩いの森にしていきますので、皆さんもぜひ、宝山湖公園に足をお運びください。三豊市には、インスタ映えすると有名な「父タケ」など、名所もたくさんあります。そして、カマタマーレ讃岐の応援もよろしくお願ひします。

お知らせ

グリーンウェイブ 下草刈り活動のご案内

公園での活動なので、お子さん連れも大歓迎。どなたでもご参加いただけます。
■5月22日(日) 10時〜12時

道具の貸し出しも予定してありますが、鎌や草刈り機などをお持ちいただける方はご協力ください。参加ご希望の方は事前に支部事務局までご連絡をお願いします。

TEL: 087-821-1503
E-mail: shikoku@oisca.org

支部の情報はフェイスブックで発信しています。ぜひご覧ください。



やっぱりおいしい！ 日本一の讃岐うどん

「うどん県」と名乗るほど、うどんが名産の香川県ですから、やっぱり紹介したいのは讃岐うどん。今では丸亀製麺やはなまるうどんなど、讃岐うどんのチェーン店が全国に広がり、いつでもどこでも讃岐うどんが気軽に味わえるようになりました。それでもやっぱり、地元香川で食べる讃岐うどんは格別です！

支部の会員として、オイスカを支えてくださっている製麺所やうどん屋もありますし、中には、出汁をとった後のいりこを、四国研修センターの養鶏用に提供してくださっているところも

あります。会員の皆さんも、それぞれに自分の「ひいき」の製麺所があり、コーヒーを飲み喫茶店に入るような感じで、毎日うどんを食べに行く人もいれば、オイスカ本部の職員を激励しようと、お気に入りの製麺所でお土産のうどんを買って、定期的に届けているという方もいます。

私のおススメは丸亀市にあるA店の利き出汁うどんです。3種類のお出汁が楽しめます。コロナが終息したら、ぜひ皆さん「うどん県」にお越しください！

四国研修センター 前所長 小野隆

おらが
自慢!

200軒以上
食べ歩きましたが
この店のうどんが
最高!



3種類のお出汁! /



熊本発！ ソーシャルビジネス始動 スモールビジネス×フェアな関係が社会を変える

オイスカは2021年からの10カ年計画の柱の一つとして、BBS (Business based Solution / ビジネスセクターとのパートナーシップとソーシャルビジネスの推進) を掲げています。その好事例ともいえるのが熊本×モンゴルプロジェクト(暮らしのの仕事・ママ応援)。熊本の女性たちとオイスカモンゴル総局とが連携して昨年度スタートしたソーシャルビジネスについてご紹介します。



女性の支援を目指して

熊本×モンゴルプロジェクト(以下、プロジェクト)の始まりは、オイスカ熊本推進協議会の石原靖也副会長が、オイスカモンゴルとの交流を目的に2018年5月に現地を訪ねたことに遡ります。雄大な自然の素晴らしさがある一方で、首都ウランバートルに人口が集中することで、さまざまな課題に直面する人々がいることを知った石原副会長は、「都市部の女性の社会的立場の向上と収入増」をテーマにした取り組みを構想。オイスカ・インターナショナル会員からの出資も受け、モンゴルのさまざまな産品を日本で販売しようと試みまし

が、輸入許可や検疫に関する課題に阻まれ、進捗が見られないままコロナ禍に入り、プロジェクトは行き詰まりを見せていました。

女性の力で前進

そこに助け舟を出したのが(財)くまもと未来創造基金の宮原美智子理事。地域の課題解決に取り組んできた同財団の活動の一つ、子育て中の女性サポートの取り組みで関わりがあった女性グループと、ハンドメイドに携わるモンゴルの女性グループをつないだフェアトレードの形で進めていくことが提案され、消費者と生産者が同じ立場でビジネスを進めるプロジェクトが、5カ年計画で動き出しました。

初年度となった21年は、プロジェクトのホームページやフェイスブックでの情報発信と合わせ、オンラインで熊本とモンゴルの女性たちとの交流を実施。商品開発に向けた意見交換を行い、フェルト製品などのテスト販売も行われるなど、プロジェクトは計画通り進捗しました。

女性たちの活躍を目にした石原副会長は、「ビジネスを経験したという自信がある男の感覚は全く役に立たない。この小さなビジネスには、国や立場を超えた『交流』というフェアな関係があり、儲けや損といった金勘定で動く従来のビジネスでは決してあり得ない『持続性』がある」と述べる。同時に、こうした交流

熊本×モンゴルプロジェクト

HPはこちら



「熊本とモンゴルの女性たちが自分らしく輝き暮らせる社会」を目指し、以下の②つのプログラムを実施



① オンライン交流

目的
両国間の相互交流/国境をこえたコミュニティづくり

内容
モンゴルと熊本をつないださまざまなオンラインイベントの開催

② ビジネスマッチング

目的
モンゴルの女性の生活水準向上と両国の女性事業者支援

内容
熊本とモンゴルの女性同士のコラボレーションによる商品づくり/両国で販路をつくり、持続可能な形で運営を継続

型のビジネスで社会が変わると感じているといいます。

モンゴルでの成果

プロジェクトは軌道に乗り、21年9月から22年2月までの売り上げは92万円に達しました。販売価格の4割がモンゴルの生産者に還元され、2割は現地でコーディネートを担当するオイスカモンゴルの活動支援に充てられます。また、モンゴルの女性や障害者の就労・起業をサポートするための「女性応援基金」を立ち上げ、売り上げの1割が基金に積み立てられます。

オイスカモンゴルのニンジン



熊本とモンゴルのコラボレーションで生まれたプロジェクトのオリジナル商品例

ン・ギリヤセド事務局長によると、コロナ禍でモンゴルへの観光客は3年間停滞しており、以前は観光客向けに販路があつた生産者たちにとって、今回のプロジェクトは新たな販路が開けたという点でも、とても価値のある事業となつたといいます。また、消費者と直接オンラインで交流できる商品が喜ばれていると実感できることで、「明るく前向きな気持ちで仕事に取り組めるようになった」という声も生産者から寄せられています。

現地の人材が強みになる

プロジェクトを担当する宮原さんは、「着実な活動ができているのは、オイスカの活動による地道な種まきが、花開いているから」と話し、コーディネートを担当するオイスカモンゴルのニンジン事務局長や訪日研修生OBでスタッフのトゥメンデンベルルについて「信頼できる現地メンバーがいることが一番の強み」と強調。打ち合わせや相談が日本語でできることが、スムーズな活動につながっているといます。

プロジェクトを統括する丸

本文紀熊本推進協議会会長は、オイスカを持つ、訪日研修生OBをはじめとする人材や各国に広がるネットワークを活かすことで実現した今回のプロジェクトを「オイスカ版ソーシャルビジネスモデル」と表現しています。小規模でもフェアな関係のソーシャルビジネスを推進することが、よりよい未来の実現につながります。

新たな広がりも

宮原さんによると、在住のモンゴル人の方からの注文や、「モンゴルのためのプロジェクトをありがとう」などのお礼の言葉も届いているそうです。また、製品の購入を通じて新たな動きも出ているとのこと。その一つが、SDGsや環境教育を推進する熊本市内の幼稚園の取り組みです。モンゴルの親子との交流イベント開催や園内で使う製品開発などの相談があり、プロジェクトで検討を進めているところだそうです。

モンゴルの製品の素晴らしさやプロジェクトに共感した方からも、新しい取り組みの輪が広がっています。



MONGOLIA



訪日研修後のプロジェクトが活かされました！

2011～12年に四国研修センターで学び、帰国後は、高松西ロータリークラブの支援を受けて、ウランバートル市内の女性を対象としたフェルトスリッパづくりの講習会を定期的に行いました。そうした経験も今回のプロジェクトの土台となりました。

オイスカモンゴルスタッフ トゥブデンドルジ・トゥメンデンベルル

グループ内の絆も強まりました！

グループ内で常にコミュニケーションをとりながら、日本の方に喜んでもらえる、よい品質のものを作る努力を続けてきました。その結果、お互いに助け合う気持ちも強まりました。今後は若い世代にも技術を伝え、この取り組みを継承していきたいと考えています。



生産者グループリーダー チュルンチメグ・バルドルジ



JAPAN -KUMAMOTO-



コロナ終息後は必ず訪問します！

「国境を越え信頼できるコミュニティ」による、小さいけれど信頼関係で作る経済循環を目指しています。みんながハッピーになる価格設定と「女性の就労支援」というSDGsの視点も含んでいます。信頼できるモンゴルの仲間から送ってもらうオーガニックな品物、これからも楽しみです。

プロジェクト担当 宮原 美智子

フェルト製品愛用しています！

ハンドメイドのスリッパと靴下、ポトルケースを愛用しています。手作りの丁寧さと品質の高さに驚きました。プロジェクトにスタッフとして参加し、モンゴルの現状を知ることから始まりました。両国の女性や子どもたちが笑顔になる活動を、現地スタッフの方と一緒にできることを光栄に思っています。



プロジェクト担当 田代 美和

今月のこの人

豊田 敏幸

西日本研修センター／副所長

西日本研修センター
いいところですよ～!



足腰の強いセンターを目指し、 農業を担う日本の若者たちも育てたい

国内研修センターで農業指導を担うスタッフの中では最古参。これまで関わった研修生は700人を超えるそう。研修生たちからは「お父さん」と慕われるベテランながら、自身も20代の頃にはたくさんの「お父さん」に支えられて今があるという。新型コロナウイルス感染拡大前は、各国に向き、ふるさとで活躍するOBたちにもさまざまな助言やサポートを続けてきた豊田副所長。これまでのオイスカの取り組みと、自身が思い描くセンターのこれからを聞きました。

——長く農業指導の道を歩んで来られましたね

最初は中部日本研修センター勤務でした。当時は技術面も含め、自分に確固たるものがなかったからか、すごく辛くて、2年ぐらいい逃げたい思いでいっぱいだった。そんな時に、近所のぶどう農家さん、「お父さん」って呼んでるんだけど、そのお父さんが紹介してくれた山梨のぶどうの苗屋さんで1年間勉強させてもらったの。そこからセンターに戻って24歳からの再スタート。お父さんには本当にお世話になりました。毎

晩のように入り浸って、話を聞いてもらって、叱られながら、技術の面でも、働く姿勢についてのアドバイスもたくさんもらってね。1年間センターを離れて勉強したことで、果樹については自信を持てたから、それ以降は、トマトなら碧南のあのの人に、スイカなら地元のある人に……って、会員さんや、そのお知り合いの農家さんを訪ねては技術を学んできた。できないことがあると研修生からボロカスに言われることもあって、「クツソー」と思いながら、がむしゃらにやっていた感じが。とにかく研修生に満足して帰ってもらいたいという思いで勉強しながら、30歳ぐらいでやっと指導員らしくなってきたと思う。その頃、JICAの研修生の受け入れも経験して、帰国後のアクションプランをつくったりする中で、研修生を満足させるだけではなく、その先にある帰国後の彼らの姿こそが、研修の成果だと強く認識するようになりました。

——それでOBのフォローアップに注力するようになったんですね

34歳の時に西日本研修センターに異動したことも転機になったかもしれないですね。MUFJの支援が始まり、毎年研修生10名の受け入れ費用を支援していただきました。研修の成果を上げ、それを実感してもらうためにも、帰国した研修生が現地で活躍

できるようにサポートすることが欠かせないと常々感じていました。帰国後に農業分野で活躍しているOBからの報告を聞くと、どこの国も農業機械が普及していないため、全て手作業で行っている状況が伝わってきます。苦労しながら日本での経験を活かして頑張っている彼らのため

——面白い取り組みですね。国内研修センターの若手指導員の育成にもよいアイデアがありますか

国際協力（外国人青年への農業指導）の枠組みでの募集だけではなく、センターの役割を広げていくつもりで、新規就農希望者に広く門戸を開くのがいいかなあと。今、うちのセ



パプアニューギニアを訪問しOBたちと再会

とある日の

豊田 副所長の1日



22年2月。研修生がいないセンターでも、研修農業の管理は日々続いています。毎日たくさんのボランティアの皆さんが農作業の手伝いに来てくださっていて、とても助かっています！

06:30 点呼

研修生がいない寂しい点呼。国旗掲揚、掃除もスタッフだけで行います。



07:30 朝食

センターの食堂で朝食。2月は地元からたくさん猪肉をいただくので朝から食べることも。

08:30 出荷作業開始

毎日多くのボランティアさんが来てくださいます。この日は昨年7月から毎週月曜日に来られる脇山野営場整備協力隊の皆さんと出荷作業。



10:00 苗の管理

夏野菜の苗の管理。2月でもハウスの中は20度を超えることも。気温変化が大きいためハウスを開けたり閉めたり、苗が乾いてないか何度も確認。



13:00 トマトの接ぎ木

光が当たらず風もない場所での作業。中部日本研修センター勤務時代に碧南の“お父さん”から学んだ技術を磨き続けています



17:30 作業終了

苗をシートで覆い、電気をつけて苗床を暖かくしてこの日の作業は終了です。



研修生がいてこそその研修センター（西日本研修センター）

ンターに勤務している飯川（裕基）君は、元々センターがある脇山地域での就農を考えていて、脇山の自治会長の重松さんからオイスカを紹介されてきたけど、この田舎では一人で農業やっていくって大変でしょ。

彼もこういう形は考えていなかっただろうけど、双方にとってよかったと思うんだよね。これを一つのモデルケースにしたい。ただ、今のセンターは足腰が弱いから、受け皿としてはまだまだ。だから農業研修や圃場環境のさらなる充実を図りながら、海外の研修生だけじゃなく、農業をやりたい日本の若者をたくさん受け入れられるセンターを目指していきたいと思っています。

豊田 敏幸（とよだ としゆき）
1988年にオイスカ開発教育専門学校入学。
91年よりオイスカ中部日本研修センターに勤務し、2004年に西日本研修センターに異動。現在に至る。神奈川県出身。2男2女の父。

自治会長さんからひとこと



脇山校区自治会
会長

重松 重興 さん

脇山地区は福岡市早良区の面積の3割を占めていてほとんどが山林、農地です。高齢化率40%のこの地域では、山間地農業を続けられる人が少なく、オイスカに田んぼや畑の管理を依頼することも増えています。オイスカには研修生やスタッフなどの若い人がいて、センターのそばにある早良高校と並んで地域に活気を与えてくれる存在です。センターで行われるサマーナイトフェスティバルや収穫祭などには多くの人が集まってきて、地域の活性化につながっています。

今はコロナの影響で研修生がなくて寂しいですが、いつも彼らが帰国する時にはセンターで見送ります。一度だけフィジーを訪問して研修生OBに再会したことがあります。「脇山の皆さんにお世話になった。家族のようだった」と言って帰っていく研修生が、母国で活躍する姿を、また見にいきたいと思っています。

豊田さんは毎日長靴で脇山を駆け回って、みんなに気さくに声をかけてくれ、みんな豊田さんのことを頼もしく感じています。これからも脇山で頑張ってもらいたいです。

—オイスカ—
歴史さんぽ

Vol.1

一人の研修生OBの思いが奇跡の森へ
ヌエバビスカヤ植林プロジェクト



1996年



2020年

撮影：フィリピン・ヌエバビスカヤ州



プロジェクト責任者
マリオ・ロペス

日本の皆さん
お元気ですか？

ヌエバビスカヤ州では、第二次世界大戦後、木材需要の高まりを受けて急速に伐採が進み、はげ山化が進行。水源が枯れ果て、同地の村に「乾燥した荒地」という意味を持つキランという名前がつけられるほどになってしまいました。この荒廃した山に森林を再生しようとオイスカの訪日研修生OBたちが立ち上がり、1993年より「ヌエバビスカヤ植林プロジェクト」がスタート。台風被害や山火事などの課題に立ち向かいながら挑戦を続け、現在、水源林としての機能を持ち、キラン村を潤すおよそ600haの奇跡の森へと再生しつつあります。

このプロジェクトの責任者は、OB

のマリオ・ロペスさん。82年の訪日研修時に、日本の美しい山々や豊かな自然が維持されている姿を見て、植林プロジェクトの発想を得たといいます。以来、ふるさとの山に森を蘇らせることがロペスさんの夢となり、研修生OBや地域の人々と共に、育苗から植林、その後の維持管理を行ってきました。日本からも大勢のボランティアが訪れ、作業に汗を流しています。

「何十年かかってでも、全ての山に木を植える」

現在も、山火事やコロナ禍での移動制限に見舞われながらも、今や一人の思いではなくなった夢を叶えるため、活動が続けられています。

写真から伝わる
さまざまなお思いに
フォーカス！





研修生から
“大坪お父さん”と
呼ばれています！



“お父さん”お手製！
\\ お漬物&梅干し //

毎年、2月ごろになると、西日本研修センターから大きな段ボールが本部事務所に届きます。中身は、大根の生漬け、はりはり漬け、高菜炒め、そして梅干し。これらは、センターの食堂で腕を振るう大坪徳生さんをはじめとする食堂スタッフのお手製で、センターの畑で採れた販売に向かない形の悪い野菜をおいしく活用したものです。研修生やスタッフのみならず、農業ボランティアの皆さんからも大人気で、センターで収穫された白米とあわせて食べると、おいしさも倍増。本部スタッフの中にもファンは多く、すぐに売り切れてしまいます。

お漬物や梅干しは、センターが参加するマルシェやバザーに出品されることもあります。お見かけの際は、ぜひご賞味ください！



朝食時、一日の“元気の源”である梅干しを一人ひとりに配り歩く廣瀬兼明所長(右)の姿が、センターの日常となっています



BOOK

お！ススメ
OISCA

国内外のオイスカスタッフから、さまざまなジャンルの「オススメ」をご紹介します！

「卵のふわふわ」 八丁堀喰い物草紙・江戸前でもなし

宇江佐真理 著／講談社 刊／680円(税別)



隠密廻り同心・梶田正一郎の妻のふは、夫の冷たい言動に日々悩まされていた。いつも助け舟を出してくれるのは「喰い道楽」で心優しい舅忠右衛門。江戸・八丁堀を舞台に繰り広げられる、温かくもどこか切ない家族の物語——。各章で登場する「黄身返し卵」や「淡雪豆腐」などの印象的な食べ物が、人々の心情をより鮮やかに映し出す。一味違う読後感を楽しみたい方におすすめです。(本部K)

読者プレゼント！

バン格拉デシユ 日・バ国旗ピンバッジ パンジャビ(シャツ)

今年、日本とバン格拉デシユは外交関係樹立50周年を迎えました(また、インド、パキスタン、スリランカとは70周年、モルディブとは55周年という節目でもあり、日本政府は2022年を「日本・南西アジア交流年」と定め、南西アジア各国と日本との交流をさらに深めようと呼びかけています)。

オイスカは1971年のバングラデシユ独立以前から同地(当時は東パキスタン)で活動しており、オイスカ総局の設立は64年のこと。東パキスタン総局として立ち上げ、独立後にバングラデシユ総局に名称を変え、



今年58年目を迎えます。

独立直前の70年、東パキスタンがサイクロンの被害を受けた際、オイスカは同総局からの協力要請を受け、全国で募金活動を展開。現地に調査団を送り、被害状況や必要な支援を調査した上で、救援団を派遣して被災地の支援にあたりました。

その後、81年にダッカ研修センターを設立。87年にはオイスカで初となる女性のための研修センターを設立し、両センターともに、現在も現地青年の育成の拠点となっています。

今回プレゼントするのは、バングラデシユの男性用シャツ「パンジャビ」2種類と、日本・バングラデシユの国旗のピンバッジ。ご覧の通り、バングラデシユの国旗は、日本の国旗と同様に赤い太陽が描かれたシンプルなデザインです。パンジャビは男性の正装で、通常は膝下に届くほどの丈の長さですが、こ

ちらは気軽に着られる丈で、ポケットまで付いた若干カジユアルな「パンジャビ風シャツ」といえそうです。シルク製で日本の綿のような風合いと落ち着いた光沢、襟の部分に施された刺繍が上品な印象です。

①ピンバッジ
②シャツ(白/L)
③シャツ(茶色/3L)
それぞれ1名の方にプレゼントいたします。

■応募方法/はがきかメールに住所、氏名、電話番号、ご希望の番号、今月号の感想、「4月号読者プレゼント」を明記の上、次の宛先までお送りください。4月末日締切です。

〒168-0063
東京都杉並区和泉2-17-5
公益財団法人オイスカ
「OISCA」編集部
E-mail oisca@oisca.org

①ピンバッジ



②シャツ(白/L)



③シャツ(茶色/3L)

第10回大阪マラソン・第77回びわ湖毎日マラソン

チャリティランナーの応援 ありがとうございました!

出場中止を知らされたのは大会10日前の2月16日。40km走って帰ってきたときのことで。複雑な心境でしたが、マラソン以外でも多くの方が同じように残念な思いをしてきたのだと実感。

マラソン当日の2月27日は、朝6時に自宅を出発。本来であれば皆さまに感謝の気持ちをお伝えし、完走のご報告をするところですが、気持ちの整理やトレーニング成果の確認という単なる自己満足になってしまいました。42km以上は走ったと思います。最後は少し歩いてしまいましたが、4時間30分でした。

大阪で走れなかったのは残念でしたが、学びの多い時間を過ごせました。ありがとうございました。

(中部日本研修センター 筑田)



2月27日に予定されていた大阪マラソンは、残念ながら一般ランナーの出場が中止となり、ご支援くださった方たちの思いと共に走るうとトレーニングを積んできた、オイスカのチャリティランナーたちも涙を飲む結果に。“自身の気持ちに区切りをつけるため”のマラソンにチャレンジしたオイスカスタッフのレポートをご紹介します。皆さまからのご支援へのお礼に代えさせていただきます。

3月5日に本部事務所の横を流れる神田川沿いを走りました。「海岸林再生プロジェクト」を担当してきた吉田俊通部長が自転車で後ろを走ってくださっていたので、一人のトレーニングの時とは違ったプレッシャーを感じながら走ることができました。

中止になってほっとした気持ちもありましたが、もう少し決定が早ければ……という思いもあり、複雑な気持ちでした。多くの方々にご支援いただいたので、大阪で走って、よい報告をするのが一番のお礼だと思っていましたが、叶いませんでした。それでもこうして走ることができ、フルマラソンには及びませんでしたが、少し自分の気持ちに区切りが付けられました。

(本部 ハルハル)



ご支援ありがとうございます！

新会員の紹介

新しく会員になられた方は次の通り。(1月1日～1月31日までの間、本部登録済分。順不同、敬称略)

■特別法人
【大阪府】タカシマヤ一粒のぶどう基金

■維持法人
【東京都】ホーチキ株式会社【愛知県】株式会社エアースプライ/弁護士法人アーヴェル/弥栄工業株式会社/株式会社鈴木産業/天神山電設株式会社/株式会社大喜荘【岐阜県】株式会社土地の果実【香川県】株式会社坂井工務店

■維持個人
【愛知県】村上典子/鈴木崇司

■寄付
1月1日～1月31日までにいただいた寄付は次の通り。(順不同、敬称略)

●全国電力関連産業労働組合総連合/「子供の森」計画と海外開発協力事業に合せて510万円

●新倉和歌子(東京都)/人材育成事業に200万円

●九州電力株式会社/西日本研修センターワンコイン・サポートプログラムを通じて人材育成事業に287万4142円

●株式会社九電工/西日本研修センターワンコイン・サポートプログラムを通じて人材育成事業に166万5000円

●金丸信吾(山梨県)/啓発普及事業と海外災害支援(フィリピン台風被害復興支援)に合せて100万円

●東日本三菱自動車販売株式会社/啓発普及事業と「子供の森」計画に合せて72万1300円

●ネクスタグループ(ネクスタ株式会社・ネクスタパッケイ株式会社・株式会社ミツワ紙工所)/啓発普及事業と「海岸林再生プロジェクト」と「子供の森」計画に合せて69万4173円

●九州電力労働組合/海外開発協力事業に65万円

●日本板硝子労働組合/「海岸林再生プロジェクト」に15万5221円

●柳沼ミヨ(静岡県)/啓発普及事業に50万円

●仙台トヨベツ株式会社/「海岸林再生プロジェクト」に15万4860円

●積水化学労働組合/「海岸林再生プロジェクト」に30万円

●ホッコー商事株式会社/啓発普及事業に25万366円

●山本哥子(福岡県)/人材育成事業に20万円

●株式会社天狗堂/「子供の森」計画に20万円

●ハートネット21/海外開発協力事業に20万円

●社会福祉法人西日本新聞民生事業団/人材育成事業に18万円

●トヨタモビリティパーツ株式会社九州北部統括支社/人材育成事業に14万5226円

●オイスカ高校職員一同/啓発普及事業に10万2000円

●株式会社ヤクルト本社/「子供の森」計画に10万円

●株式会社オーレック/「子供の森」計画に10万円

●岡崎昌三(兵庫県)/啓発普及事業に10万円

2021年度 オイスカ冬募金

1月1日～1月31日までに2021年度オイスカ冬募金にいただいた寄付(10万円以上は次の通り。(順不同、敬称略))

●櫻木久枝(愛知県)/30万円

●豊田汽缶株式会社/30万円

●酒井屋旅館/30万円

●平吹禎佑(愛知県)/10万円

●東洋金属株式会社/10万円

●倉金一廣(茨城県)/10万円

●松井徳之進(静岡県)/10万円

●小野瀬武康(茨城県)/10万円

●勝田好和(愛知県)/10万円

●種村高一(茨城県)/10万円

●四日市電機株式会社/10万円

●株式会社村金/10万円

●オイスカ茨城推進協議会/10万円

今月の表紙写真

Photo by Ninjin Giliyased



「日本人が来てくれた！」子どもたちの歓迎の踊りには、うれしい気持ちがあふれている。コロナ禍で国境を越えた往来ができずにいる間も、彼らは日本人と一緒に植えた日の思い出を胸に、木のお世話を続けてくれている。(モンゴル)



OISCA 4月号 定価160円
 発行人/中野悦子
 発行所/公益財団法人オイスカ
 〒168-0063 東京都杉並区和泉2丁目17番5号
 TEL (03) 3322-5161 FAX (03) 3324-7111
 E-mail oisca@oisca.org
 編集: OISCA / 測上保一 林久美子 倉本有沙
 アートディレクション/土肥幹人
 デザイン/土肥幹人 坂巻貴行
 印刷・製本/株式会社ケープリント

本誌掲載の記事・写真・イラストなどの無断転載を禁じます。

次号予告

OISCA
 JUNE | 6
 2022

《TOPIC》

互恵的協力への
 気づき(仮)

理念 — 人と育む、地球といきる —

Vision

実現したい未来

人々がさまざまな違いを乗り越えて共存し、自然と調和して生きる世界

Mission

日々果たすべき使命・存在意義

私たちは、すべてのいのちが健やかに守られるよう、感謝の心を持つ「人」を育み、いのちの土台となる森づくりや、共に助け合う社会づくりに取り組みます

Value

私たちが大切にしていること

- 互いを理解し尊重
- 土から離れない
- 感謝の心を持ち、へこたれない「人」を育む
- 地域に根差し、住民の「良くしたい」を尊重

Spirit

Visionを達成するために、
私たち一人ひとりが
日々実践する心のあり方

- 先を展望する想像力を持つ
- 着実に一歩ずつ積み重ねる
- 仲間とともにチーム力を発揮する
- 挑戦し続ける
- 感謝の心を持つ
- へこたれない
- 経験から学び進化する
- 真摯である
- 人間味にあふれ、楽しみながら！

公益財団法人オイスカ

オイスカは、会員・支援者の皆さまからの会費や寄附金によって運営されています。「公益法人」としての認定を受けているため、所得税・法人税・相続税、また条例で定められた自治体では住民税も控除対象となります。受領書をお届けしますので、申告の際にご利用ください。

● 特別会員（年額1口） 法人／10万円 個人／5万円

● 維持会員（年額1口） 法人／4万円 個人／2万円

● マンスリーサポーター 個人／月々2,000円～

※特別会員と維持会員には、会員としての差異はなく、口数とともに、自由にお選びください。

※会員、マンスリーサポーターの皆さまには、広報誌「OISCA」をお届けします。

※新入会年度は、入会月によって納入金額が異なります。

● 「子供の森」計画支援金（年額1口） 個人・法人／5,000円

※海外の支援地域の活動案内（年1回）やニュースレター（年2回）をお届けします。

※子どもたちのグリーティングカード（年1回）が届きます。

ウェブからも支援のお申し込みができます ▶ <https://oisca.org/>

お問い合わせや資料請求のお申し込みは



公益財団法人
オイスカ

〒168-0063 東京都杉並区和泉2-17-5

☎ (03) 3322-5161 ☎ (03) 3324-7111

E-mail oisca@oisca.org

<https://oisca.org/>

国内研修センター

中部日本研修センター 〒470-0328 愛知県豊田市勤八町勤八27-56 ☎0565-42-1101 ☎0565-42-1103
 関西研修センター 〒563-0101 大阪府豊能郡豊能町吉川1120 ☎072-738-3699 ☎072-738-3901
 四国研修センター 〒761-2103 香川県綾歌郡綾川町陶5179-1 ☎087-876-3333 ☎087-876-3334
 西日本研修センター 〒811-1112 福岡県福岡市早良区小笠木678-1 ☎092-803-0311 ☎092-803-0322

国内支部

北海道支部 〒062-0931 札幌市豊平区平岸1条1丁目8-8 ラリス生活研究センター1F ☎011-867-9684 ☎011-867-9685
 宮城県支部 〒980-0014 仙台市青葉区本町2-10-28 カメイ仙台グリーンシティビル6F ☎022-265-3350 ☎022-265-3350
 首都圏支部 〒168-0063 東京都杉並区和泉2-17-5 (公財)オイスカ内 ☎03-3322-5161 ☎03-3324-7111
 山梨県支部 〒400-0016 甲府市武田1-2-5 3F ☎055-267-5951 ☎055-267-5951
 長野県支部 〒380-0838 長野市泉町584 長野県経営者協会総務部内 ☎026-235-3522 ☎026-235-3529
 富山県支部 〒939-2226 富山市下夕林280-3 ☎076-468-7120 ☎076-468-7128
 静岡県支部 〒431-1115 浜松市西区和地町5815 ☎053-401-3980 ☎053-401-3981
 愛知県支部 〒470-0328 豊田市勤八町勤八27-56 オイスカ中部日本研修センター内 ☎0565-42-1162 ☎0565-42-1103
 岐阜県支部 〒503-8603 岐阜県大垣市久徳町100番地 太平洋工業㈱本社内 ☎0584-47-9420 ☎0584-47-9419
 関西支部 〒541-0058 大阪府中央区南久宝寺町4-4-1 新御堂ビル ☎06-6244-2366 ☎06-6244-9422
 広島県支部 〒730-0041 広島市中区小町4-33 ㈱エネルギー&B/パートナーズ内 ☎082-242-7804 ☎082-242-4706
 四国支部 〒760-0017 高松市番町2-17-15 ファロス第1ビル2F ☎087-821-1503 ☎087-821-1536
 西日本支部 〒811-1112 福岡市早良区小笠木678-1 オイスカ西日本研修センター内 ☎092-803-0311 ☎092-803-0322

OISCA NETWORK

福 島 〒963-0534 郡山市日和田町字大窪50-8 ㈱根本産業内 ☎024-958-2643 ☎024-958-3741
 茨 城 〒311-0113 那珂市中央852-9 ☎029-298-2539 ☎029-298-2539
 神奈川 〒231-0003 横浜市中区北仲通3-33 ㈱内フューチャーセンター内 ☎080-5016-2584
 三 重 〒510-0958 三重県四日市市小古曽1-1-7 中村建設㈱内 ☎059-345-1101 ☎059-345-0745
 奈 良 〒630-8444 奈良市今市町53-6 ☎0742-63-6277 ☎0742-63-6277
 岡 山 〒700-0011 岡山市北区学南町2-6-11 PORTA美容室内 ☎086-252-3027 ☎086-252-3027
 徳 島 〒770-8555 徳島市青島本町東2-29 ㈱内電力㈱徳島支店総務課内 ☎088-656-4593 ☎088-656-4511
 愛 媛 〒790-0924 松山市南久米町乙24-84 ☎070-8524-0349 ☎089-948-8682
 高 知 〒780-0870 高知市本町1-6-24 高知商工会議所総務企画部内 ☎088-875-1177 ☎088-873-0572
 佐 賀 〒840-0826 佐賀市白川2-1-12-4F ☎0952-28-1368 ☎0952-28-1368
 長 崎 〒858-0908 佐世保市光町109 ㈱堀内組内 ☎0956-47-2127 ☎0956-48-5069
 熊 本 〒865-0055 玉名市大浜町2173-1 丸光グループ本社内 ☎0968-76-2161 ☎0968-76-2162
 大 分 〒870-0002 大分市浜の市1-3-7 ㈱大地企画内 ☎097-533-2101 ☎097-533-5040
 宮 崎 〒880-0843 宮崎市下原町227-6 ☎0985-26-5673 ☎0985-26-5673
 鹿児島 〒892-0817 鹿児島市小川町15-1 ㈱南日本総合サービス内 ☎099-224-3833
 沖 縄 〒902-0077 沖縄県那覇市長田2-12-9 セレクション長田101 ☎098-943-2871 ☎098-943-2881